



あま市美和・甚目寺歴史民俗資料館だより

ニュースレター

平成 31 年 3 月

No.009

編集・発行

美和歴史民俗資料館

(生涯学習課 文化振興係)

〒490-1292

愛知県あま市花正七反地 1

電話 (052) 442-8522



伊福地区 伊勢湾台風 被災写真 (昭和 34 年)

画像提供 牛田博子氏

明治以後の台風のなかで最大の被害をもたらした伊勢湾台風は、今からちょうど 60 年前の 9 月 26 日に襲来、当地域も甚大な被害を蒙った。当時の七宝村助役の回顧録によれば「夜が明けた。福田川の堤防に立ち、対岸を望むも富田町一帯は白海と化し伊福の出郷(でき) 9 軒も海面に漂って見える。これが昨日まで豊穡の秋を楽しませた田園であったとは…」とその状況を綴る。

今回紹介する写真は、同年 10 月中頃に伊福地区で撮影された一枚。台風によりなぎ倒された大木のトンネルをくぐり、自転車で買い物に向かう主婦の姿が写しだされる。右側の林は同地区の八幡神社で、全ての木が東からの強風を受け西に傾いている。最大瞬間風速 60 メートル、その威力を思い知らされる一枚で、風化させてはならない記憶のひとつ。

一方、北部に位置する甚目寺、美和地区は、いち早く疎開先として各中学校を提供し、被災者支援にあたった。甚目寺中学校では 10 月 23 日に鍋田干拓の被災者を悼む合同慰霊祭を実施、その遺影には、この春、彼の地に嫁いだ若き花嫁姿のものもあり、弔問者の涙を誘ったという。

*資料館では平成 10 年までの市内で撮られた写真の収集をはじめました。何卒ご協力のほどを！

平成 30 年度 事業報告

〈1〉文化財に関すること

● 県天然記念物 下萱津フジ 一般公開

3 日間で 232 名の見学者があった。開催にあたり下萱津区老人クラブ連合会、あまの神社仏閣へ行こう！プロジェクトの協力を得た。

● オコワ祭の映像記録 普及編(DVD)が完成

同祭映像記録製作委員会に委託し普及編DVD および記録編(アーカイブ)を作製した。

〈2〉企画展示会

期間	展示会名
4/22～5/16	美和 「山田双年の花鳥画展」 甚目寺 「レトロなおもちゃ展」
5/29～6/30	「第 28 回 ときのきねんび展」
7/22～9/30 8/3～9/24	美和 「昔と今のあま市展」 甚目寺 「夏に会える鳥たち展」
11/3～12/9	美和 「明治のあま市展」 甚目寺 「市の無形民俗文化財展」
3/10～	美和 「浮世絵コレクション展」 甚目寺 「源氏節人形展」

〈3〉歴史散策事業 アルケミスト

実施日	内容
4/15	蓮華寺「二十五菩薩お練り供養」見学会
4/28・29	下萱津のフジと周辺の散策
5/19	愛西市北部・藤ヶ瀬を歩く
8/21	萱津神社「香の物祭」見学会
10/14	木田八剱社「湯の花神事」見学会
10/21	井和村を歩く～下田・川部を中心～
11/18	古地図を頼りにまち歩き～市北部～

〈4〉水文化継承事業 エコきつず調査隊

実施日	内容
7/28	水質調査(地元河川)
8/3	木曽川の水生物調査(木曽川下流事務所主催)
8/18	まとめ&エコきつずサミット

対象は市内の小学生。蟹江町教育委員会と共同のうえ実施した。

〈5〉講演・公演会 事業

実施日	演題	講師
5/12	大徳院の歴史と文化財	堀江泰史氏
6 月	①古時計の魅力について	宮崎照夫氏
11/25	明治の海部津島地方について	園田俊介氏
2/9	②中国大返し考	藤田達生氏 ^他
2/23	あまゼミナール	成田保弘氏 ^他
2/24	文化を活かした地域おこし	高橋賢次氏
3/17	甚目寺説教源氏節を聴く	加納克己氏

①「ときのきねんび展」開催中の毎土日に展示説明会を実施した。②海部歴史研究会の主催する歴史講演会で、30 年度は当市が幹事として会を運営した。

〈6〉文化体験講座事業 トイナオス

実施日	回数	講座名	講師
5/20	1	福島正則出生譚	松井 誠氏
6 月～	10	古文書解読講座	藤井智鶴氏
11 月～	3	坐禅に学ぶ	山田泰信氏
12/20	1	しめ縄教室	竹田武夫氏

〈7〉検定事業 (主催は実行委員会)

ジュニア検定(小学 6 年生児童対象)

6 年生児童を対象に出前授業(12 月～1 月)を行い、その後各校でジュニア検定を実施してもらった(11 校で 744 名が受検)。

あま市ものしり検定(一般向け)

初級編を実施した。39 名が受検し 31 名が合格した。受検者 1 名に「あま市歴史マスター(本検定を 4 回合格)」の称号が贈られた。

ものしりジュニア選手権

2 月 17 日にジュニア検定で学んだ知識を発揮する場としてクイズ選手権を実施、児童 29 名が参加し美和東小チーム(3 年連続)が優勝した。

〈8〉学習支援活動

移動博物館

収蔵資料より当地域の生活に関わり深い、暮らしの道具を 10 点ほど学校に展示し、3 年生児童を対象に授業(1 時限)を行った(11 校)。

〈9〉ガイドボランティア養成事業

第 5 期は 8 名が受講。歴史ガイドの知識を身につけるべく当館の主催事業を中心に参加、あるいは実際の歴史ガイドのサポート役として活動した。

本書はB4版の原稿用紙に墨書きで記述されたもの。全200ページからなり上中下の三巻におよぶ。本書（上巻）にある小序（しょうじょ）によれば、編さんは大正5年（1916）、著者は丹羽翠江（すい）とある。その人物像は不明ながらも「甚目寺町史」には、文化人として紹介される。

翠江は大正2年に除隊、帰郷を果たすや萱津志編さんにとりかかり、同郷の石川氏の協力を得て、実に3年間を費やし、本書を完成させたという。

その上巻は、主に地域の成り立ちと萱津宿について記述される。なかには本書編さん当時の地域の地形についての記述もあり大変興味深い。

本書が世に出たことはなく、秘蔵されてきたもので、限られた紙面ではあるが、主な内容を抜き刷り、ここに紹介したい。

村名のいわれ

古くは「草津」と呼ぶ。または「茅津」「狩津」「海津」とも記されたが、鎌倉時代以降に「萱津」に落ち着く。

「熱田祭奠（さいてん）年中行事故実考」に曰く、草社（くさやしろ）あるいは、草姫（くさのひめ）などに見える。江戸時代後期、津田正生（つだまさなり）の著した「尾張国地名考」によれば、「里老曰く、草津社あり草野姫を祭るゆえに、村名を草津と呼ぶ。それを後世、萱津に書き改める」と、「またある人曰く、萱津の萱は茅・葺・蘆（あし：イネ科の多年草）の意味にして、往昔海濱にして葺・蘆多し、よって萱洲と呼びたるを萱津と言いなおせり」と。

古くは阿波手と呼びたるを後、草津と改称し更に萱津と書くに到れるなり。中尾義稲（なかおぎとう）曰く、「栗殿（あわ）は阿波傳（あわで）と訓ずべし、いま海東郡萱津庄上萱津村の古名なり」とも。

「夫木集」には、「尾張は阿ハでの里の童のとどろきか、物もきこえず。草野姫神を祭るを以て草社と呼び。渡船場たりしにより草社津と呼び、遂に草津と呼ぶに到りしなるべし」と、その賑わいを記述す。

分属の歴史

いにしえは愛知郡に属せり「本國帳」に愛知郡萱津天神と書かれ、「和名類聚（わみょうるいしゅう）」では、愛知郡駅所と書けり。室町末期に限り、川を部落の東にさだめて以来、東宿（ひがしじゅく）のみを愛知郡に残し、海東郡に属す。大正2年（1913）4月に海東郡海西郡を合して海部郡となし。

昔は萱津荘と言ひ、松葉荘にも属せり江戸時代には清州代官所に属す。明治5年（1872）9月に第六大区三小区に、9年8月第六区三小区となる。役所を中萱津に置けり、17年8月聯合（れんごう）区域を改め、第三組戸長役場を甚目寺に置き、22年市町村制度におよび10月上、中、下、萱津を合して萱津村をなし役場を中萱津に置けり。

古駅として

日本武尊（やまとたける）東征の際、しばらく萱津にとどまる。その当時すでに道なりし、推古天皇15年の勅命により東海に道開く。当時なお宿駅なく露営せり。大化年中に関所及び宿駅を設置されるが、萱津の「宿」となりしはこの



時のこと。平安朝より鎌倉時代までの間は、不破(ふは)を越えて、美濃に入り洲股(すのまた)川を渡り黒田、一宮を経て萱津に到り、熱田、鳴海に通ずる道であった。

萱津は交叉地(こうさち)として貨客の集散地であった。この当時より、しばらくは殷賑(いんぎん)となり、神社仏閣が随所に建立せられ、傀儡(くぐい)等も暮らした。しかし鎌倉時代に流出土砂のため陸となり、舟路は市腑(いちへ)までとなった。

小栗街道について

林良泰(はやしりょうた い：郷土史家)曰く、世俗、小栗判官助重(おぐりはんが んすけしげ)と照手姫(てるて ひめ)との通過せし道によりこの名あり。助重は応永20年常陸(ひたち)より鎌倉に來り、三河に移り、丹波に寓し、のち美濃、紀伊等に赴き、以て此の街道を通過せずと伝わる。といえども一説には、徳川家康の臣で小栗忠政(おぐりた だまさ)のこと

とも伝わる。彼は浜松、大坂間を往来し武勲多し。この人が進撃の際に、この官道(かんだう)を護見して進みたるにより伝わるも、その出所は明らかならざれば、にわかに信じ難き。そのみならず小栗街道と言えるは尾張地方のみに存在せずして、他国にもあまたあり。これ多くの古道(こど)の痕跡に、その伝説をもって見れば助重・忠政等の旅路にもとづくものではない。

形勝

①阿波手杜(あわで もり)

阿波手は萱津の古名なり。「杜」の本村にあたることから“阿波手の里の杜”という意味にて、阿波手ノ杜と称するなり。本村往古は海邊にして大河あり。村は鹿屋野比賣神(かやぬひめ：草姫と略す)を祭り、のち草津と改称したるも、なお杜は旧名を残して今日に至る。

②定井

鬼頭景義(きとうかげよし)、新田48か村開墾の際、灌漑のために出来たるもの。「尾張徇行記(おわりじゆんこうき)」曰く、萱津定井は明暦元年(1655)に完成、水奉行彦坂氏により修復すれども人足(にんそく)は河下の村より出す。今は宮田水利組合に属し、事務所を中島郡役所内に置く。萱津井筋は、かつて五条川の細流なりし、色附(いろつけ)川と呼びたる。「尾張名所図絵」には、この川を改修し灌漑の用に供したるは寛文年中(1611~73)にして50有余か村の用水なり。

③新川

「尾張国地名考」では、新川通の川上なる久地野(くじの北名古屋)の堤坊上に碑文あり。これは天明4年(1784)、御奉行水野君(千之右衛門：せんのかみうえもん)の新川を開削して、大蒲沼の灌水を落されし功績を称賛した碑石なり。28か村の悪水を切落して、不毛を助くるよし。樋口翁の作文に見る。水野士淳は、新川開鑿の主宰たれども、その発端は中村先生なり。先生、大雨の降るごとに、蓑笠を着て国内を駆ける。ひそかに水利を考へ、海東郡には日光川、ここには新川の悪水落なくてはかなわざるところなりと…。のちに官人、これを執行したまへと水野氏に教示せられたり。世の人々、水野氏の功績を善く知るも、中村先生を知らず。

④古川跡

今は五条川の先より直線に稲葉地村へ向けてその跡らしきものを所々に見受けられる。新川開掘以前はたびたび氾濫の難にあったが、今はその憂(うれ)なし。この川は郡界をなして、下萱津に流れる。

⑤矢台池(やたいいけ)

上萱津矢台にある。縦182間(300メートル)、横幅18間(33メートル)の池で、フナ、ナマズなど多く捕れる。宝暦8年5月5日の大雨により五条川が氾濫、堤防が切れ、ここに一大池が出現した。大正3年(1914)、名古屋電鉄津島線設立により大半が埋められる。いまその面積は僅かとなる。この水は五条川より分水し甚目寺、本郷、坂牧の用水として利用される。

⑥薬師池

上萱津薬師にある。縦19間(34メートル)、横幅7間(12メートル)。矢台池と同じく池名は字薬師にあるを以て名付く。明治30年代、地主、畑土をもって埋め、田となしたれば、池の面積は半分にも充たない。

⑦阿波手池

上萱津車屋。縦65間(117メートル)、15間(25メートル)。ここは古くよりあり、かつての面積は今ほど大きくはないが、明治4年7月14日、五条川の氾濫により、今のごとく大池となる。



⑧内池と外池

下萱津字替地にあり。このあたり一帯の池なり。あるいは川の流れによってできる池のようなもので、内池外池という。両池の間に五条川の堤防があつて川の近くを内池、村に近い方を外池と呼んだと福田源蔵(げんぞう)翁の話しである。

中巻、下巻はNo.010以降に掲載します

市の指定文化財誕生！

今回、新たに指定文化財となったのは「甚目寺説教源氏節人形および正本 附^(つけ)_(たり)その関連資料」で、その内訳は人形18体、正本81冊、音源テープ、写真さらに紙媒体資料を合せ計275点になります。これら関係資料の多くは平成22年に市内在住の服部政彦氏(家元宅)より市に寄贈いただいたもので、多くは代々の家元によって受け継がれ大切に保管されてきた史資料です。

説教源氏節とは、江戸浄瑠璃に説教祭文が加わった大衆芸能で、江戸時代末期までは「説経祭文新内^(しんない)ぶし」と呼ばれ、これが明治に入ると「平家琵琶」に対抗し「説教源氏節」と名を変えました。

甚目寺説教源氏節は、西今宿出身の中村伝吉(美里太夫)をその始まりとし、彼は大阪で人形一式と舞台を調達、当地において本格的に人形芝居を行うも同6年に死去。しかしその技術は連綿と地元を受け継がれ、最盛期は明治後期から昭和初期に活躍した4代目美寿清太夫^(みすきよ)_(たゆう)でした。昭和40年頃まで当市はもとより名古屋市などで上演され人気を博してきましたが、6代目美寿松太夫



(みすまつ)^(たゆう)の死去により、後継者も無くその姿を消します。

今回、市の有形民俗文化財に指定するに際し、「甚目寺説教源氏節人形調査報告書」(A4

判:40ページ)を刊行しました。詳しくは、本書をご覧ください。1部500円で頒布中です。

第9回 あま市ものしり検定合格者 発表

平成31年3月3日に実施された「あま市ものしり検定」の合格者は、以下の通りです。

(敬称略) 永田さき子・古橋雅勝・鈴木ゆかり・加藤伸子・近藤紀久・近藤富士子・西沢稜而・桑原幸司・加藤三千年・小島克彦・信岡彦弘・松井 誠・伊藤靖彦・林 登子・中ノ瀬君子・横井孝彦・熊澤節子・小山 昇・赤坂孝子・深川照之・竹嶋健三・小山 武・野々垣弘利・安藤益澄・鈴木安裕・小林高由・横井幸一・伊藤敏雄・橋本一夫・早川知江・増田和仁の以上31名でした。おめでとうございます。(下線の方は今回初めて合格者)

甚目寺歴史民俗資料館

開館時間 9:00~12:00、13:00~16:00
休館日 水曜日、木曜日
入場料 無料
交通 名鉄甚目寺駅より南に徒歩5分
駐車場 10台
電話 (052) 443-0145
住所 あま市甚目寺東大門8(甚目寺会館3階)

美和歴史民俗資料館

開館時間 9:00~16:00
休館日 水曜日、木曜日(6月は木曜のみ)
入場料 無料
交通 名鉄木田駅より北に徒歩10分
駐車場 20台
電話 (052) 442-8522
FAX (052) 445-5735
住所 あま市花正七反地1

E-mail bunkashinko@city.ama.lg.jp